

1. 職名・氏名 准教授 片岡剛文

2. 学位 学位 環境科学博士、専門分野 微生物生態、授与機関 北海道大学、
授与年月 平成20年9月

3. 教育活動

(1)講義・演習・実験・実習	
①担当科目名（単位数） 主たる配当年次等 海洋生物資源学フィールド演習（2） 学部1年生	
②内容・ねらい（自由記述） 学部内の構成や教員が行っている研究内容を学生が知ることを目的として、乗船実習と課題研究に取り組んだ。担当したグループでは、微生物を題材にして、学生が主体的に研究を実践することを目的とした。研究の過程を、科学的思考・問題解決方法・プレゼンテーション方法に分け、各回にグループディスカッションすることで、研究に必要な過程を経験する機会とした。乗船実習では、議論のみではなく安全に留意して観測現場を体験し海洋生物資源学に興味を持つことをねらいとした。	
③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述） 1年生全員が学部の内容を理解できるように綿密な情報伝達と丁寧な指導を心がけた。グループ全員が参加し、主体的な研究が遂行できるようにアドバイスを行った。グループディスカッションでは様々な研究事例を示すことでブレインストーミングを促した。実験ならびにレポート作成では、グループ内で役割分担し、効率の良い作業体制を作ることを促し、プレゼンテーション資料の作成では、メールやLINEを利用して緊密なコミュニケーションをとり十分な議論と丁寧な添削を行った。また、乗船実習では研究船での生活でトラブルが起こらないように引率した。	
①担当科目名（単位数） 主たる配当年次等 海洋微生物生態学実験（1） 学部3年生	
②内容・ねらい（自由記述） 顕微鏡の取扱い方法、細菌の性状検査、器具などの滅菌方法、培地の調整方法、無菌操作などの微生物学的実験の基礎を習得する。水中の細菌の計数と分離を行い、微生物学的並びに分子生物学的手法を用いた細菌の同定を行う。	
③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述） 自ら採取した試料から細菌を分離して実験の試料とすることで、各自の実験に対する興味を引き出す。実験指導と危険の防止に努めた。	
①担当科目名（単位数） 主たる配当年次等 微生物学概論（2） 学部2年生	
②内容・ねらい（自由記述） 微生物の種類・性質・環境中での役割・利用についての基礎知識を習得するとともに、微生物と地球環境との繋がりを総合的に考察する事が出来る。また、最新の知見と学問的な知識との連続性についても習得する事が出来る。	
③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述） 多目的ホールで約50人を対象とした講義のため、板書の代わりにパワーポイントで講義進行と板書事項を示して授業内容が全員に伝わるように工夫した。使用したスライドは F-LECCS で	

共有し、復習環境を整備した。また、毎回の授業後に小テストと授業についての感想・質問を兼ねた出席カードを利用して、授業内容の定着状況を把握するとともに、一人一人とのコミュニケーションを図った。

①担当科目名（単位数） 主たる配当年次等
科学英語 II (2) 学部 3 年生

②内容・ねらい（自由記述）

科学英語論文を読み、論理的な文章構成を理解するとともに、微生物生態に関わる知見を収集する。論文の内容をスライドにまとめ、研究室のセミナーで一定時間内に発表する。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）

逐語的な翻訳ではなく、文章の構造と論理的な文脈を理解するために、一文・段落・チャプターに分解し階層的な文章理解を目指した。文章構造を把握するために接続詞（句）に着目した解説を行った。発表用スライド資料は丁寧な添削を行った。興味喚起のため論文は個人が興味を持つ論文を学生自ら選定できるようにサポートした。

①担当科目名（単位数） 主たる配当年次等
海洋微生物生態学 (2) 修士課程

②内容・ねらい（自由記述）

微生物生態学に関する最新かつ博い専門知識を身につけるとともに、主体的に文献を調べ他人に伝える知識を身につけることをねらいとした。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）

微生物生態学に関する最新の教科書を使用することで、分野の最新かつ博い知識の習得ができるように工夫した。各章を 1 コマで終えるように予定を立て、章ごとに深く議論することで新しく身につけた知識を応用する技能習得ができるように工夫した。

①担当科目名（単位数） 主たる配当年次等
専門特別講義 II (1) 修士課程

②内容・ねらい（自由記述）

最先端で活躍する研究者を招致し、セミナー形式で講義を行う。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）

生態学分野で活躍する若手研究者を招致し、専門分野にとらわれず科学に対する広い知見を身に付けられるように講師を選抜した。受講者には必ず 1 つ以上質問するようにし、科学的な議論を身につける練習となるように工夫した。

①担当科目名（単位数） 主たる配当年次等
基礎演習 (1) 学部 3 年生

②内容・ねらい（自由記述）

英語論文を題材に、読む、書く、プレゼンテーションをする。の 3 つのスキルを身につける。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）

発表前に発表要旨を作成してもらい、添削する過程で個別に丁寧な添削ならびに論文読解と作文指導を行う。その際に学生の到達度に合わせて、モチベーションを高めるように指導した。

①担当科目名（単位数） 主たる配当年次等
専攻演習 (2) 学部 4 年生

②内容・ねらい（自由記述）

科学的な根拠に基づいて実験を行い、仮説に基づいて結果を解釈するスキルを身につける。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）
実験室内の実験のみではなく、フィールドサンプリングの際には特に安全の確保に気を配った。実験前と後にはディスカッションの場を設けて、実験結果を正しく解釈できるように務めた。

①担当科目名（単位数） 主たる配当年次等
卒業論文（8） 学部4年生

②内容・ねらい（自由記述）
自らが携わった研究の背景、実験手法の原理を理解するとともに実験により得られた結果を正しく解釈することと。それらを統合し、短時間のプレゼンテーションで分野外の他人に誤解なく説明できるようになる。

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）
資料調査、実験手法の習得、実験、データ整理や論文執筆など、多数の複雑な作業が必要であるため、単純な作業に分解することで、学生が混乱したり途中で作業を投げ出さないように心がけた。特に卒業論文執筆においてはディスカッションの機会を多数設けることで思考力を鍛えるように務めた。

(2)非常勤講師担当科目

①担当科目名（単位数） 開講学校名

②内容・ねらい（自由記述）

③講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）

④本学における業務との関連性（自由記述）

(3)その他の教育活動

内容
大学院特別講義世話人：
「大学院特別講義/謎のテングザルを追ってジャングルへ：フィールド研究の可能性」：松田一希（2017年度）
「特別公開セミナー/酸素非発生型光合成細菌は古地球環境で何をしていたのか？」：高部由季（2017年度）
「特別公開セミナー/酸素非発生型光合成細菌は古地球環境で何をしていたのか？」：花田智（2017年度）
「極限環境生物クマムシについて」堀川大樹（2019年度）

4. 研究業績

(1)研究業績の公表

①論文

(タイトル、共著者の有無 (共著の場合は主たる担当箇所について)、掲載雑誌名 (号数)、掲載 (受理) 年月日)

- Distribution of harmful-bloom-forming cyanobacterium, *Microcystis aeruginosa*, in 88 freshwater environments across Japan. T. Kataoka*, K. Ohbayashi, Y. Kobayashi, H. Takasu, S. Nakano, R. Kondo, Y. Hodoki. *Microbes and Environments*. 2019, Dec. 7 Accepted.
- Data on taxonomic annotation and diversity of 18S rRNA gene amplicon libraries derived from high throughput sequencing. T. Kataoka and R. Kondo*. *Data in Brief* 2019, vol. 25 DOI: <https://doi.org/10.1016/j.dib.2019.104213>.
- Protistan community composition in anoxic sediments from three salinity disparate Japanese lakes. T. Kataoka and R. Kondo*. *Estuarine, Coastal and Shelf Science*. 2019, vol. 224, pp. 34-42. DOI: <https://doi.org/10.1016/j.ecss.2019.04.046>.
- Depth-dependent transcriptomic response of diatoms during spring bloom in the western subarctic Pacific Ocean. S. Suzuki*, T. Kataoka, T. Watanabe, H. Yamaguchi, A. Kuwata, and M. Kawachi. *Scientific Reports*. 2019, vol. 9: 14559, DOI: <https://doi.org/10.1038/s41598-019-51150-8>.
- The influence of chemical form of antimony on soil microbial community structure and arsenite oxidation activity. T. Kataoka, S. Mitsunobu, and N. Hamamura. *Microbes and Environments*. 2018, vol. 33(2), pp. 214-221.
- Production of dibromomethane and change in bacterial community in bromoform-enriched seawater. T. Kataoka*, A. Ooki, and D. Nomura. *Microbes and Environments*. 2019, vol. 34(2) pp215-218.
- Collaborative environmental DNA sampling from petal surfaces of flowering cherry *Cerasus × yedoensis* 'Somei-yoshino' across the Japanese archipelago. T. Ohta, T. Kawashima, N. O. Shinozaki, A. Dobashi, S. Hiraoka, T. Hoshino, K. Kanno, T. Kataoka, S. Kawashima, M. Matsui, W. Nemoto, S. Nishijima, N. Suganuma, H. Suzuki, Y-h. Taguchi, Y. Takenaka, Y. Tanigawa, M. Tsuneyoshi, K. Yoshitake, Y. Sato, R. Yamashita, K. Arakawa, and W. Iwasaki. *Journal of Plant Research*. 2018. DOI: <https://doi.org/10.1101/165522>
- Phylogenetic diversity and distribution of bacterial and archaeal *amoA* genes in the East China Sea during spring. T. Kataoka, K. Suzuki, T. Irino, M. Yamamoto, S. Higashi, and H. Liu. *Archives of Microbiology*, 2017, DOI: 10.1007/s00203-017-1442-6
- Seasonal and geographical distribution of near-surface small photosynthetic-eukaryotes in the western North Pacific determined by pyrosequencing of 18S rDNA. T. Kataoka, H. Yamaguchi, M. Sato, T. Watanabe, Y. Taniuchi, A. Kuwata and M. Kawachi. *FEMS Microbiology Ecology*, 2017 vol. 93 (2), fiv229.

②著書

(タイトル、共著者の有無 (共著の場合は主たる担当箇所または担当ページ)、出版年、出版社名)

③学会報告等

(タイトル、報告学会 (大会) 名 (開催年月日)、共同報告者の有無 (共同報告の場合は主たる担当箇所))

- 「親潮域における春季珪藻ブルームのメタトランスクリプトーム解析」鈴木重勝・片岡剛文・

- 渡辺剛・桑田晃・山口晴代・河地正伸. 『第 11 回日本ゲノム微生物学会年会』 慶應大学湘南藤沢キャンパス, 神奈川 (2017 年 3 月 2- 4 日)
- ・「霞ヶ浦における *Microcystis aeruginosa* 種内系統群の多様性を把握する」山口晴代・田辺雄彦・片岡剛文・富岡典子・河地正伸. 『日本植物分類学会第 16 回大会』 京都大学吉田キャンパス, 京都 (2017 年 3 月 9 日- 12 日)
 - ・「霞ヶ浦で見られるシアノバクテリアの 16S rRNA 遺伝子アンプリコンによる群集構造解析」山口晴代・片岡剛文・辻彰洋・中川恵・河地正伸. 『日本藻類学会第 41 回大会』 高知大学朝倉キャンパス, 高知 (2017 年 3 月 24- 25 日)
 - ・The *ftsZ* amplicon analysis reveals intraspecific dynamics of *Microcystis aeruginosa* in Lake Kasumigaura, Japan. Haruyo Yamaguchi, Yuuhiko Tanabe, Takafumi Kataoka, Noriko Tomioka and Masanobu Kawachi. 『The 8th Asian Pacific Phycological Forum (APPF)』, University of Malaya, Kuala Lumpur (8- 13 October, 2017)
 - ・仙台湾における微小プランクトン群集の季節変動 (Seasonal dynamics of phytoplankton and bacteria community in Sendai Bay) . Takafumi KATAOKA, Tsuyoshi WATANABE, Yukiko TANIUCHI, Haruyo YAMAGUCHI, Shigeho KAKEHI, Tomoko SAKAMI, Masanobu KAWACHI, Akira KUWATA. 『JpGU-AGU Joint Meeting 2017- 海洋生物資源保全のための海洋生物多様性変動研究 (A-OS26) - 』 幕張メッセ, 幕張 (2017 年 5 月 21 日)
 - ・Microbial community function and response associated with metalloid redox transformations in the contaminated environment. 濱村奈津子・片岡 剛文. 『JpGU-AGU Joint Meeting 2017- 生命圏フロンティア (B-CG07) - 』, 幕張メッセ, 幕張 (2017 年 5 月 22 日)
 - ・お花見メタゲノムプロジェクト結果報告. 大田 達郎・川島 武士・土橋 映仁・平岡 聡史・星野 辰彦・菅野 圭一・片岡 剛文・川島 秀一・松井 求・根本 航・西嶋 傑・菅沼 名津季・鈴木 治夫・田口 善弘・竹中 要一・谷川 洋介・恒吉 桃香・吉武 和敏・荒川 和晴・山下 理宇・岩崎 渉. 『NGS 現場の会第 5 回研究会: 微生物・メタゲノム』 仙台国際センター, 仙台 (2017 年 5 月 22-24 日)
 - ・嫌気的な湖底堆積物中の原生生物の群集組成. 片岡剛文・田仲あいら・前川鈴香・中野伸一・近藤竜二. 『環境微生物系学会合同大会 2017』 東北大学川内北キャンパス, 仙台 (2017 年 8 月 29 日)
 - ・琵琶湖底泥中の従属栄養性原生生物: 現存量と単離培養. 前川鈴香・片岡剛文・高尾祥丈・中野伸一・近藤竜二. 『環境微生物系学会合同大会 2017』 東北大学川内北キャンパス, 仙台 (2017 年 8 月 29 日)
 - ・親潮域の春季珪藻ブルームに見られる鉛直方向に異なる窒素代謝機構. 鈴木重勝・片岡剛文・渡辺剛・桑田晃・山口晴代・河地正伸. 『環境微生物系学会合同大会 2017』 東北大学川内北キャンパス, 仙台 (2017 年 8 月 29 日) ポスター賞
 - ・霞ヶ浦で見られるプロティストの 18S rRNA 遺伝子アンプリコンによる群集構造解析. 山口晴代・片岡剛文・中川恵・河地正伸. 『環境微生物系学会合同大会 2017』 東北大学川内北キャンパス, 仙台 (2017 年 8 月 29 日)
 - ・大量塩基配列を用いた湖沼堆積物における真核微生物群集の解析. 片岡剛文・近藤竜二. 『日本珪藻学会第 37 回研究集会』 三方青年の家, 福井県 (2017 年 10 月 14 日)
 - ・若狭湾およびその沖合海域における栄養塩とクロロフィル a 濃度の季節変化. 理堀隆人・杉本亮・片岡剛文・兼田淳史・山下慎也・高垣守. 『2017 水産海洋学会』 広島市西区民文化センター, 広島 (2017 年 11 月 16- 19 日)
 - ・Enrichment culturing of organic-gas producing bacteria from cold seawater. Takafumi Kataoka, Atsushi Ooki, Daiki Nomura. 『8th Symposium on Polar Science』 国立極地研究所, 立川 (2017 年 12 月 4-8 日)
 - ・Bacterial production of organic gas in cold seawater. Takafumi Kataoka, Atsushi Ooki, Daiki Nomura. 『5th International Symposium on Arctic Research』 一ツ橋ホール, 東京 (2018 年 1 月 15- 18 日)
 - ・メタバーコーディングによる霞ヶ浦における植物プランクトンの動態解析. 山口晴代・片岡

剛文・中川恵・河地正伸.『第83回日本陸水学会』岡山大学 (2018年10月5-8)

- Enrichment of marine bacteria with adding a halocarbon, Bromoform (CHBr₃).片岡剛文・大木淳之・野村大樹.『日本微生物生態学会大会2018』, 沖縄コンベンションセンター (2018年7月11-13日)
- Abundance, diversity and cultivation of anaerobic protists in anoxic lacustrine sediments.近藤竜二・片岡剛文.『日本微生物生態学会大会2018』, 沖縄コンベンションセンター (2018年7月11-13日)
- 重金属等有害元素の複合暴露に対する土壌微生物群集の応答.片岡剛文.『第11回北陸合同バイオシンポジウム』, 石川県山中温泉山中座 (2018年10月26-27日)
- Functional Analysis of Microbial Community Associated with Arsenic Transformation in Contaminated Soil, Natsuko Hamamura・Takafumi Kataoka, 『2019 Aian Society of Microbial Ecology』, Taiwan, 11-13 May・2019
- Diversity of Microbial Arsenic and Antimony Transformation Pathways Associated with Antimony Mine Tailing. N. Hamamura, Y. Yamashita, T. Kataoka & S. Mitsunobu. 『Goldschmidt conference 2019』, Spain, Barcelona. (Aug. 20, 2019)
- 水圏の嫌気環境における従属栄養性原生生物 - 現存量、多様性、生理・生態 - . 近藤竜二・片岡剛文.『第33回日本微生物生態学会山梨大会』, [日本陸水学会共催シンポジウム-水の中の「細菌だけじゃない」微生物の生き様-]. SL-2, 山梨大学 (2019年9月11日)
- ポリスチレンビーズを用いた海産原生生物の餌粒子サイズによる捕食選好性, 石田香澄・片岡剛文.『日本微生物生態学会大会2019』, P1-69, 山梨大学. (2019年9月12日)
- 若狭湾における成層期の栄養塩供給過程, 本間駿・大西徹・兼田淳史・杉本亮・片岡剛文・理塚隆人・山下慎也.『日本海洋学会2019秋季大会』, 19F-02-P5, 富山大学. (2019年9月25-29日)
- 透過型電子顕微鏡による海産原生生物(Stramenopiles)の細胞内微細構造観察における化学固定法と急速凍結置換法の比較. 岸上 達哉・山田 和正・石田 香澄・吉川 伸哉・片岡剛文.『第12回北陸合同バイオシンポジウム2019』, ポスター24, あわら温泉「清風荘」. (2019年10月25-26日)

④その他の公表実績

- 日本微生物生態学 和文誌「アウトリーチシーン執筆」(2020年3月号)
- 日本微生物生態学 和文誌「アウトリーチシーン執筆」(2019年3月号)

(2)学会活動等

学会でのコメンテーター、司会活動 (担当報告名、担当学会(大会)名(開催年月日))

- 日本微生物生態学会大会2019、座長、2019年9月10日

学会での役職など (学会名)

- 日本微生物生態学会 微生物生態教育研究部会長 (2019年1月～(1年間))
- Microbes and Environments, Associate Editor (2017年1月～(3年間))
- Microbes and Environments (日本微生物生態学会誌) 編集委員 (2017年1月～(3年間))

学会・分科会の開催運営 (担当学会(大会)名(開催年月日)、開催場所)

- 『第三回 JSME・インハイ-高校生によるポスター発表-』主催:日本微生物生態学会. 審査とサポートスタッフ (2017年8月29,30日)
- 『第四回 JSME・インハイ-高校生によるポスター発表-』主催:日本微生物生態学会. 企画運営幹事 (2018年7月12日)
- 『第五回 JSME・インハイ-高校生によるポスター発表-』主催:日本微生物生態学会, 審査と幹事 (2019年9月10日)
- 『高校生によるポスター発表』主催:日本水産学会福井大会, 審査 (2019年9月8日)
- 『微生物アート展』共催:日本微生物生態学会, (2019年9月10日)

・『微生物生態教育研究会小集会』主催：日本微生物生態学会，(2019年9月11日)

(3)研究会活動等

①その他の研究活動参加 (参加研究会名、調査活動名 (期間))

2017年度琵琶湖調査 R/V はす 琵琶湖 (1日間×1回)

②その活動による成果

サンプルを採集し、その成果をもとに国内学会でポスター発表を1回行った。

①その他の研究活動参加 (参加研究会名、調査活動名 (期間))

2017年度三方五湖調査 F/V 第二吉永丸・第三とりは丸 日向湖・久々子湖 (1日間×4回)

②その活動による成果

サンプルを採集し、その成果をもとに国内学会で口頭発表を1回行った。

①その他の研究活動参加 (参加研究会名、調査活動名 (期間))

2017年度若狭湾海洋資源調査 R/S 福井丸 若狭湾 (2日間×4回)

②その活動による成果

サンプルを採集し、微生物群集を調べるためにDNAを分析した。

①その他の研究活動参加 (参加研究会名、調査活動名 (期間))

2018年度若狭湾海洋資源調査 R/S 福井丸 若狭湾 (2日間×6回)

②その活動による成果

サンプルを採集し、微生物群集を調べるためにDNAを分析した。

①その他の研究活動参加 (参加研究会名、調査活動名 (期間))

2018年度三方五湖調査 F/V 第二吉永丸・第三とりは丸 日向湖・久々子湖・三方湖・水月湖 (1日間×4回)

②その活動による成果

サンプルを採集し、首都大学東京と共同研究を行った。

①その他の研究活動参加 (参加研究会名、調査活動名 (期間))

2018年度三方湖成出調査 (1日間×12回)

②その活動による成果

サンプルを採集し、首都大学東京と共同研究を行った。

①その他の研究活動参加 (参加研究会名、調査活動名 (期間))

2019年度三方湖成出調査 (1日間×12回)

②その活動による成果

サンプルを採集し、栄養塩と微生物群集を調べるために水試料を採集した。

①その他の研究活動参加 (参加研究会名、調査活動名 (期間))

京都大学遠藤助教との共同研究 (3日間×2回)

②その活動による成果

共同研究のための海水資料の有機物濃度を計測した。

①その他の研究活動参加 (参加研究会名、調査活動名 (期間))

<p>首都大学東京光合成複合微生物研究室(Photomic)でのセミナー発表,2019年1月25日</p> <p>②その活動による成果 研究打ち合わせとセミナー発表を行った「Studies on community composition of microbes in natural environments」</p>
<p>①その他の研究活動参加 (参加研究会名、調査活動名 (期間)) NIES 凍結保存講習 (2019年1月25日)</p> <p>②その活動による成果 微生物の凍結保存手法開発の予備実験を行った。</p>
<p>①その他の研究活動参加 (参加研究会名、調査活動名 (期間)) 令和元年度環境ウイルス研究集会参加 京都大学宇治キャンパス化学研究所 (2019年11月2日)</p> <p>②その活動による成果 研究集会に参加し、環境ウイルスに関する最新情報を収集した。</p>
<p>(4)外部資金・競争的資金獲得実績</p> <ul style="list-style-type: none"> 共同推進研究 北極域研究共同推進拠点 研究者コミュニティ支援事業 「海洋・海水中の有機ガスを分解する細菌によるメタン利用に関する発展研究」(2017年度) 共同研究 a 京大大学生態研センター 「湖沼底泥中の嫌気性原生生物の分離・培養と生理」(2018年度) 若手 B 科研費 「環境中の細菌捕食性原生生物群集の増殖特性定量法の開発と実証」(2017～2019年度) 基盤 C 科研費 「水圏の底泥中における嫌気性原生生物による有機物の分解・無機化」(2019年度) 学長裁量枠 D 「核酸標識物質 (BrdU) を用いた原生生物の核酸に蓄積する細菌由来成分の定量」(2017年度) 戦略的課題研究推進支援 「若狭湾における微生物群集の季節変動と環境要因の影響評価」(2018年度) 戦略的課題研究推進支援 「核酸をトレーサーとした細菌・原生生物間の炭素輸送量推定のための新規手法の開発」(2019年度)
<p>(5)特許出願</p>

5. 地域・社会貢献

<p>(1)学外団体</p> <p>①国・地方公共団体等の委員会・審議会 (それぞれの名称、業務内容、担当期間)</p>
<p>②国・地方公共団体等の調査受託等 (それぞれの名称、業務内容、活動期間)</p>

③ (公益性の強い) NPO・NGO 法人への参加 (それぞれの名称と活動内容、活動期間)
④ (兼業規程で業務と見なされる範囲内での) 企業等での活動 (企業名、活動内容、活動期間)
⑤ 大学間あるいは大学と他の公共性の強い団体との共催事業等 (事業名称及び主催・共催者名、活動内容、活動期間)
⑥ その他 (名称、活動場所、活動期間) <ul style="list-style-type: none"> ・ 高等学校インターンシップ受入れ (2名; 2018年10月29-11月2日) ・ 福井丸による若狭湾における原生生物と原核生物の群集構造の季節変化を調べるための調査 福井県水産試験場 (2017年度内に4回乗船) ・ 派遣講師『平成30年度 海のふれあい教室 プランクトンの世界をのぞいてみよう』主催: 福井県海浜自然センター. (2018年5月6日) ・ 派遣講師『令和元年度 海のふれあい教室 プランクトンの世界をのぞいてみよう』主催: 福井県海浜自然センター. (2019年5月6日) ・ FBC ラジオキャンパスようこそ県大研究室 放送 (2017年12月2日)
(2) 大学が主体となっている地域貢献活動等
① 公開講座・オープンカレッジの開講 (タイトル名、開催場所、開催日時) <ul style="list-style-type: none"> ・ 公開講座「あっとおどろくミクロの世界」 -福井県立大学創立25周年記念- 福井県立大学小浜キャンパス (2017年7月29日)
② 社会人・高校生向けの講座 (タイトル名、開催場所、開催日時) <ul style="list-style-type: none"> ・ 高等学校説明会 於 美方高等学校 (2017年7月6日) ・ 高等学校説明会 於 福井農林高校 (2018年7月9日) ・ 高等学校説明会 於 武生高等学校 (2019年7月4日)
③ その他 (名称、活動場所、活動期間)
(3) その他 (個人の資格で参加している社会活動等) (活動内容、主たる活動場所、活動期間)

6. 大学の管理・運営

(1) 役職 (副学長、部局長、学科長) (職名、期間)
(2) 委員会・チーム活動 (名称、期間) <ul style="list-style-type: none"> ・ 論集編集委員会 2017年度～2018年度 ・ 全学HPWG 2017年度～2018年度

- ・大学グッズ・SNS WG 委員 2019 年度
- ・ランチタイムセミナー係 2016 年度～2017 年度
- ・学部・学科 HP 係 2016 年度～2018 年度
- ・親睦会 2016 年度～2017 年度
- ・実験実習 永平寺 C 金曜日 2017 年度～2018 年度
- ・アドバイザー（フィールド実習採点・履修指導） 2017 年度～2018 年度
- ・初年次教育 WG 2018 年度～2019 年度
- ・卒業修論実行委員 2019 年度

(3)学内行事への参加

(行事名、参加日時)

- ・白檜祭（トークショー出演）（2017 年 10 月 7 日）
- ・白檜祭（二人羽織出演）（2018 年 10 月 7 日）
- ・ランチタイムセミナー（幹事）（2017 年 9 月 - 12 月）
- ・学部合同セミナー・親睦会（幹事）（2017 年 12 月 22 日）
- ・学部合同セミナー・親睦会（参加）（2018 年 12 月 22 日）
- ・学部合同セミナー・親睦会（参加）（2019 年 12 月 20 日）
- ・ランチタイムセミナー発表（2019 年 12 月 11 日）

(4)その他、自発的活動など

(活動名、活動内容、活動期間)

- ・首都大学東京 2018 年度に実施する共同研究（「三方五湖の光合成細菌の時空間的分布」）について、サンプリング計画を議論した。（2017 年 12 月 12 日）
- ・国立環境研究所 2019 年度より実施する共同研究のため、凍結保存方法を習った（2018 年 11 月 9 日）
- ・首都大学東京 2018 年度に実施したサンプリングと得られたデータについて議論した。（2018 年 11 月 26 日）
- ・首都大学東京 光合成複合微生物研究室において分子生物学的手法の指導を行なった（2019 年 1 月 25 - 26 日）
- ・京都大学化学研究所 海水中の有機物分析を共同で実施した（2019 年 8 月 18-20 日, 10 月 7-9 日）